

## 漢文教材における問題点

——「桃花源記」の訓読とその符号を例に——

月 野 文 子

### はじめに

漢文習得期には 訓読 が重要であることはいまでもない。漢文独特の言い回しは、繰り返し声に出して読むことによつて身に付く。また、声を出して読む楽しさも漢文の授業ならではのものである。その 繰り返しの音読練習 をより効果的にするためには、適切な訓読符号が付された教材が提供されなければならない。しかし、現行の漢文の教科書の中には、訓読の符号の付し方等にいささか問題があるものが見受けられる。

本稿では、その現状を把握し、より良い訓読 とそれに適したテキストについて考えるために、陶淵明の「桃花源記」<sup>(注1)</sup>を一つの例として、教育現場で新任教師と高校生が直面するであろう漢文教材の問題点（訂正すべき点や注意すべき点）を、とくに 訓読 の側面から指摘しておきたい。

筆者は、訓読重視の立場から、通常「訓点」と呼ぶもののほかに ルビ や 中黒、さらに特殊な 豎点 などについても触れるので、「訓点」ではなく「訓読の符号」という語句を敢えて使用する次第である。なお、送り

仮名表記の ゆれ については紙幅の都合上、本稿では扱わない。

さて、陶淵明の「桃花源記」は教材として「人気が高い」とされるが、それは、言い換えれば「教材として扱いやすい」という、教える側の意見であることは言をまたない。

本作品が教材として扱いやすい理由として、指導参考書等が掲げているのは、主に次の三点のようである。

作者陶淵明の知名度が高いこと。

異境訪問譚としてのおもしろさ。

句法・語法の単純さ。訓読記号の簡易さ。

確かにその通りなのであるが、だからといって授業の準備が簡単に済ませられるわけではないし、高校生がすぐに授業に乗ってくるわけでもない。これらの特徴をどのように活かした授業展開をしていくか、である。

の知名度の高さは、他の陶淵明の作品も含めて、文学史的な説明がしやすい。漢文本文の扱いに自信のない新任教師ほど、文学史的な解説に時間をかける傾向があるが、陶淵明の文学史的な位置づけをするには、その当時の社会的な状況だけでなく、中国における 隠遁 隠逸 のイメージを理解させなければならぬ。それは、後々の時代まで陶淵明の作品が愛され続けた理由——中国文学の歴史の根底に流れている思想——にまで繋がるものでなければならない。ただ 田園詩人 として記憶させても意味がないだろう。

については、ストーリー性があり、高校生に興味を持たせやすいのは確かであるが、そのストーリーの把握も、繰り返し読むではじめて可能になることである。幾時間かをかけて授業を進める都合上、本文を途中で区切らざるを得ないのであるが、作品を細切れに読んで細切れに解説しただけでは、場面の転換のテンポ良さも伝わらない。

必要箇所について予め説明をしたあと、本文全体を通して読む時間を毎回確保しておきたい。なお、作者陶淵明の意図は 異境訪問 を描くことにあるのではなく、そこに住む人々の 平和で素朴な暮らし にあるのだが、それは陶淵明の他作品を併せて読まないと高校生には理解しにくいだろう。問題はどのようにしてこれらの作品を扱うかである。最低限、この「桃花源記」とセットになっている「詩」に触れないわけにはいかないのだが、これを併

せて載せている教科書はないようである。

については、文の構造も簡単であり、難しい句法も殆どないので、初級・中級の教材に適している。後に詳しく述べるが、工夫次第で 上下点 の使用を一カ所で済ませることも可能である。この一カ所も上下点としては最も単純な方たちである。ただ、受験期の復習に活用する場合には、返り点と共に句読点の位置も工夫していく必要があるだろう。

教材としては比較的扱いやすいといえるものの、本文（三三〇文字）は少し長めなので、授業の進め方、つまり、本教材に何時間かけて、それをどのように区切るか、などについては綿密な計画が必要であろう。頭の中で思い描くだけの指導案などもつてのほかである。

さて、現行の漢文教科書にはかならずといってよいほど採られている「桃花源記」であるが、今日使用される訓点の基礎となった「句読、返点、添仮名、読法」（明治四十五年三月）によって訓点の統一がはかられる以前から、漢文教材の定番となっていたようである。

教材としての人気の高さの裏に、実は、教師の誰もが「かつて学んだことがある」という隠された理由がある。それ故、教材研究の手間が省けると錯覚してしまうのである。そこに落とし穴がある。古くから教材として活用されていたが故に、先行する教科書の本文および訓点をベースにして、適宜改良してきたと思われる。その為に、現行の標準的な方たちに改訂しきれない部分が残ってしまうこともあったのである。それに気付かず、版が重ねられているものもあるようである。

昨今のように、教師が雑務に追われ、教材研究はおろか、授業の直接的な準備にも時間をかけることのできない状況ではなおさら信頼できる教科書が必要とされるのである。しかし、現実には適切さを欠く部分が見られるのである。せめて、馴染みの教材ゆえの安心感が本文および訓点確認の怠りにつながってはいないか、という反省を我々は常に心掛けていたい。それは、教科書編集担当の側についても同じであって欲しいものである。過去の教材の孫引きなど論外である。

今回は、出版社五社の教科書八種類（いずれも平成十九年度用として発行されたもの）を中心に比較調査したが、<sup>（注）</sup>いずれの教科書も、本文の一字一句にいたるまで「適切な読み」に心を砕いているとは言い難いようにもおられる。教科書によっては、表記上の方針に統一のとれていないものさえ見受けられた。

学校の教科会議等で教科書を選択する際に、或いは、個々の教員が授業準備をする際に、教科書の表記上の問題点に注意が向かず、結果的に、高校生を置き去りにしたかのような授業展開を生みはすまいか。教材を作る側、教える側には馴染みの教材であっても、高校生にとっては初めて接する教材であり、また、そこに付された訓点は高校生にとって、ほぼ 絶対 的なものであることを忘れてはならないだろう。

以下、教科書によって訓点の付し方に相違がみられる箇所および訓読が不適切と思われる箇所を中心に考えていく。

### 読み仮名と語釈の数は多すぎないか

訓読符号の具体的な問題に入る前に、まず、読み仮名と語釈について触れておきたい。古文漢文の教科書では、各出版社とも欄外（下段）に語句の意味を説明している。本教材においては、欄外で説明する語句の数は三十五語程度（但し、句法の説明は含まない）が平均的である。少ないもので三十語、最も多いものは四十語にも及ぶ。

しかも、これらの語釈はいずれも本文の内容に沿ったかたちで意味が説明されており、単漢字、熟語を合わせた延べ文字は八十文字をこえるものさえある。「桃花源記」の本文が三百二十字であり、本文中に繰り返し出てくる文字も多いので、実際に使用されている文字の種類は二百字程度である。無論そこには「魚」「林」「山」「田」「人」など、日常的に使用される文字も少なくない。そのなかで、四十ちかくもの語句（多くが熟語である）の意味が説明されているとすると、殆ど漢和辞典を引かずに済んでしまう。

数学や英語に予習の時間を多く割かねばならない高校生が、教科書の欄外に説明してある語句をわざわざ辞書を引いて確認することはまずないだろう。辞書を引かなければ実力はつかない。漢文は文学作品を解釈して鑑賞する

ものであると同時に、語学（中国古典語）学習でもあることを忘れてはなるまい。辞書を引くことなく英語が上達することがないのと同じである。漢和辞典を引いた回数と漢文の実力は比例する。

語句の説明ばかりではない。さらに本文中の語句にルビが多く付されており、「読めない漢字があれば辞書で調べなさい」という基礎作業の指示が出せない。語句の意味も吟味せずに、読み仮名を多く付ければよいというものではないだろう。実際の指導内容がこれによって狭められているとしたら問題である。親切すぎる語注では学習の便宜を図ったことにはならない。高校時代の教科書のルビの多さが禍してか、音訓索引でしか漢和辞典を引けない大学生は昨今、少なくないのである。

そもそも、漢文の授業の目的は何か。単元の目標は何か。その教材によって、哲学を学ばせようとするのか、文学作品として味読させようというのか、或いは漢文の読解力をつけさせるためか。また、理解の到達点をどのあたりに求めるのか。それぞれの目的に合わせて教材は作られ、授業は行われるべきである。教科書を作成する側が注意すべきは本文として使用する題材選択に限らない。脚注で説明する語句の選択、本文中のルビの付け方も、教室における適切な指導法を想定しながらの作業でなくてはならない。当然、これから述べていく「本文にどのように訓読符号を付すか」という問題とも連動する。

予習を殆どしてこない（する時間のない）高校生が、授業中に最も集中して聞き取ってノートに書き留めようとするのは通釈である。しっかりとした読みがあれば、通釈は自ずとついてくるものであることを彼らに気付かせることも、教科書の過剰サービスによって難しくなってしまうている。いたずらに欄外の語釈を増やすことは高校生を漢和辞典から遠ざけるだけである。漢字には複数の意味があり、その中から文脈に即したものを選び出していく訓練こそが重要なのである。その訓練を跳び越えて、作品の深読みをさせる傾向がありはしないだろうか。それでは読解力がつくまい。

さらに言えば、辞書を引かないで、そこに記載された語句の意味（既に文脈に沿った意味にととのえられている）をそのまま覚え、教師の補足説明を聞いただけでは、「読み解く」歓びを感じることはないだろう。英語の文章を

辞書を引きながら解釈する際の、読み解けた喜び、意味がうまくつながった時のささやかな達成感は何れしも経験のあることだろう。その喜びを抜きにして、ただ、現代語訳を暗記して定期試験に臨む、その場限りの漢文では、学習の意味がない。

### 「夾岸」のルビについて（読み仮名は適切か）

忽逢「桃花林」、夾<sup>レ</sup>岸<sup>ニ</sup>数百歩、中無<sup>ニ</sup>雜樹<sup>一</sup>。

（忽ち 桃花の林に逢ふ。岸を夾むこと数百歩、中に雜樹無し。）

この部分では、八種類いずれの教科書も判で押したかのように、「夾」の字に「さしはさむ」と読み仮名を付している。何故、「はさむ」ではなくて「さしはさむ」でなければならないのか。

「さしはさむ」は辞書類によれば、

物と物との間にさし入れる。はさみこむ。（小学館『古語大辞典』）

間に入れる。はさみこむ。さしこむ。（岩波書店『広辞苑』）

と説明される。古語においても現代語においても、あきらかに「はさむ」と「さしはさむ」ではニュアンスが異なる。「差し挟む」は細い物や薄い物を何かに入れ込むというような場合<sup>（注）</sup>に使用する例が圧倒的に多い。「桃花源記」の該箇所は、河（河岸）を夾んで両側に桃樹が生えていることをいうものであり、日本語の「さしはさむ」の語感とは異なることはいうまでもない。

恐らく、江戸時代にこうした読みのものがあり、その読みぐせが習慣的に今日まで残ってしまったということなのである。習慣的な読みぐせと、守るべき伝統とは区別しなければならない。わざわざその読みを振り仮名のかたちで残し続けたということは、其の語の意味について全く吟味せずにただひたすら権威主義を継承しただけということである。訓読は 日本語訳 であるという最も基本的な事柄が置き去りにされているとは思いたくないが、訓読は当然のことながら、適切な 文語 でなければならぬわけだが、江戸時代の訓読（訓読＝解釈）には誤っ

たものや不可解な読みぐせも少なくない。伝統的な読みに従ったという思いこみの例である。注意しておきたいものである。

### 漢字をどこまで訓読みする（読み砕く）か

前掲の「夾」字のことも含めて、漢文を訓読する際にどこまで訓読みする（和語に置き換える）かという問題は、初級向け教材においては特に注意を要するだろう。本来、訓読することは翻訳することである。しかも、その翻訳は文語で行うのがきまりである。しかし、平安時代のように、可能な限り大和言葉（雅語に近いもの）に置き換えようとすれば、文語と口語とが乖離している現代においては、かえって理解を妨げてしまうことになるだろう。

筆者は、音読みのままでも意味が通じるものは単漢字でも熟語でも音読みした方がよいと考える。江戸時代の「転倒読みは文義を害する」とか「日本語の格を破壊する」とかいう論争を再び持ち出すつもりはないが、こういう根本的な議論が教育の現場で全く顧みられないのは問題であろう。漢文を扱う以上、訓読のことは避けては通れない。ともかく、各漢字の読みを音か訓か決める際には、理解のし易さと共に、漢文としてのリズムや歯切れの良さも考慮しながら、言葉を何度も自分の舌にのせたくて決めていかなければならない。その配慮が十分ではない教科書は避けるに越したことはないが、教える側がそういう視点を持つのと持たないのでは、授業の展開にも大きな差が出てこよう。声に出して読みやすい事と理解しやすい事とは表裏一体をなすものである。教材を選んだり、プリントを作成したりする際は、十分気を付けたいものである。

以下、本作品の中で、音読みにすべきか、訓読みにすべきか、考えておくべき箇所を挙げる。いずれも、教科書によって読み方が異なっている部分である。

A 漁人甚異之、復前行、欲窮其林。

この一文では「異之」と「前行」に二通りの読みがされている。



「これをあやしむ」

(明治書院『新編古典』、大修館『古典1』『漢文読本』、東京書籍『精選古典』『新編古典』、  
教育出版『古典漢文編』、研数出版『必修漢文』)

「これをイとす」

(右文書院『新古典』)

である。また、それに続く「前行」を「すすみゆきて」とするか「せんこうして」とするかなどは、それぞれの主義に任せてもそれほど問題にはならないが、一つの文章の中でその統一がとれていないものもある。なるべく漢語として読もうとする姿勢を貫くなら、それでもよいが、「異之」を「これをあやしむ」と読み下しておきながら、

B 便要<sub>レ</sub>還<sub>レ</sub>家、設<sub>レ</sub>酒殺<sub>レ</sub>鶏作<sub>レ</sub>食

(便ち要して家に還り、酒を設け鶏を殺して食を作る)

の箇所では、「要」を「もとめる」とは読まないで「ヨウス」と音読みするのは如何であろうか。「必要とする」意に訳せる箇所であれば、「ヨウス」の方が意味を取りやすいかもしれないが、なお、殆どの教科書が「ヨウ」としているようであるが、「むかへて」とルビを付すもの(東京書籍)もある。どの読み方をとるにしろ、指導時にはその単漢字の意味だけではなく、「要求」「要望」などの熟語を例示して説明した方がよい。「要」の主語・目的語が省略されていることを理解させるのはもちろんである。音読みするか訓読みするかの問題は熟語の場合にも注意が必要である。

C 阡陌交通、鶏犬相聞

(阡陌交通し、鶏犬相聞こゆ)

「阡」は南北に通じる道、「陌」は東西に通じる道で、あぜ道が縦横に通じている意である。この「交通」の読みが教科書によって異なっているのである。

「ウツウ」



(大修館『古典1』『漢文読本』)

こもこもツウじ

(右文書院『新古典』、明治書院『新編古典』、教育出版『古典漢文編』、研数出版『必修漢文』)

まじはりツウじ

(東京書籍『精選古典』『新編古典』)

の三通りの訓読がなされている。この箇所は、先に触れた「異」を「イ」とするか「あやしむ」とするかの場合と違つて、読み方によつて意味がことなつてしまうので注意が必要である。最も適切と思われるのは「まじはりつうじ」である。の「コウツウ」の熟語の音読みは、日常生活で使用するため、「交通量」「交通手段」など名詞的なイメージがつよく、逆に理解しにくい面があるようである。

しかし、の「こもこも」では意味が異なつてしまふ。「こもこも」はもともと「此も此も」(どれもこれも)であつて複数の個体をさす語で、転じて「かわるがわる、入り交じつて」の意となつたもので、「道」をいう場合にはふさわしくない。「こもこも」と訓読すると、「入り交じつて」などと苦しい語釈をしなければならない。土地が広々している(本文では「土地平曠」とはいえ、桃源境の限られたエリアでそれほど沢山の道路があつて、どれもこれも通じているというのでは、区画整理された住宅地のようで、のどかな田園風景のイメージも消し飛んでしまふ。縦横の道路が「交わり通じている」でよいのである。この「こもこも」の読みも江戸時代の権威主義的な訓読がそのまま継承されてしまつた例で、適切ではない。

### 句読点の位置と返り点

冒頭において、本作品は工夫次第では上下点の使用が一カ所で済むとしたが、そのことについて確認しておこう。多くの教科書は、次の二カ所で上下点を使用している。

A 此中人語云、不<sub>レ</sub>足<sub>下</sub>為<sub>二</sub>外人<sub>一</sub>道<sub>上</sub>也。

(此中の人の語りて云く、外人の為に道<sup>い</sup>うに足らざるなり、と。)

B 太守即遣<sup>下</sup>人随<sup>二</sup>其往<sup>一</sup>尋<sup>中</sup>向所<sup>下</sup>誌

(太守即ち人をして其の往くに随ひて向に誌しし所を尋ね遣め…)

Aの文は比較的構造が単純なので、一二点を夾んで返るという上下点の役割を説明し易いし、入門期の高校生もすぐに理解できよう。しかし、Bは難解である。上下点だけでなく、中点も使われており、しかも、上点はレ点と合体した「ㄥ」点である。

これについては、

b 太守即遣<sup>レ</sup>人随<sup>二</sup>其往<sup>一</sup>尋<sup>二</sup>向所<sup>レ</sup>誌

(太守即ち人を遣りて其の往くに随ひて向に誌しし所を尋ぬ)

とすることが可能である。また、東京書籍の『精選古典』、『新編古典』のように、

b 太守即遣<sup>レ</sup>人随<sup>レ</sup>其往<sup>一</sup>尋<sup>二</sup>向所<sup>レ</sup>誌

(太守即ち人を遣りて其れに随ひて往かしむ。向の誌しし所を尋ぬるに…)

としてもよい。ならば、次のようにすることもできるが、訓読の落ち着きが悪い。

b 太守即遣<sup>三</sup>人随<sup>レ</sup>其往<sup>一</sup>尋<sup>二</sup>向所<sup>レ</sup>誌

(太守即ち人をして其れに随ひて往きて向に誌しし所を尋ねしむるも…)

応用期の教材として利用する際には、従来使用されてきたBの訓点有望ましいが、初級者に使用するテキストとして考える際には、返り点の付し方を工夫する必要があるだろう。

なお、「遣」については、

他動詞的に「つかわす」「さしむける」

使役の助字「しむ」

のいずれととらえるか、という問題が生じるので注意しなければならない。ただ、「遣はす」は配下の者を差し向

ける意であるから、おのずと使役のニュアンスを含む<sup>(35)</sup>。

句読点の位置によって訓読が変わる例を見たので、ついでに、本作品の最後尾にあたる劉氏についての「未果尋病終」の部分についても触れておきたい。これも句読点の位置と関わる問題である。「尋」を「たずねる」意と取るべきか、或いは「ついで」の意とするか、句読点を打つ位置できまる。

A 欣然規<sup>レ</sup>往。未<sup>レ</sup>果、尋病終。

(欣然として往かんことを規<sup>はか</sup>る。未だ果たさず、尋<sup>つ</sup>いで病みて終はる)

Aの訓読において、劉氏が果たせなかったことは、桃源境を たずねる ことであった。してみれば、敢えて「尋」の字を特殊な読み方ともいえる「ついで」としなければならぬ根拠は不明である。ならば、

B 欣然規<sup>レ</sup>往。未<sup>レ</sup>果<sup>レ</sup>尋、病終。

(欣然として往かんことを規<sup>はか</sup>る。未だ尋<sup>たず</sup>ねるを果たさずして、病みて終はる)としてよいだろう。こちらの方が意味は取りやすいであろう。また、直前の文章で、

遣<sup>レ</sup>人隨<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>往、尋<sup>二</sup>向所<sup>一</sup>誌

として、「往く」と「尋ねる」を使用しているので、この部分も「往く」と「尋ねる」の組み合わせと見た方がよい。文脈上のリズムからも、意図的なくり返しの表現であると捉えた方がよいと思われる。

このように、句読点の位置によって、「尋」を全く別の意味に取らねばなることも把握しておきたい。いうまでもなく、句読点の歴史は新しい。文章の区切り方は、句読点を付した人の理解がそこに反映されているにすぎない。句読点の位置については、教科書や参考書によってかなり差があることも知っておきたい。口語訳するときには注意が必要な箇所もでてくる。

また、一文をどこまでとするか、は訓読時の息の長さとも関わるが、内容によってはどこで区切るか迷うこともある。

其中往来種作。男女衣著悉如外人。

（其の中に往来し種作す。男女の衣著は悉く外人の如し。）

其 中 往 来 種 作 男 女 著 衣 悉 如 外 人。

（其の中に往来種作する男女の衣著は悉く外人の如し。）

右の例は、の場合には前半部の主語が省略されていると見なさなければならぬ。では、「往来種作」はすぐ下に続く「男女」を修飾するかたちであると説明しなければならぬ。このような構文を見慣れた教員には、「男女」の語は上にも下にも係ると理解できるのだが、高校生にはやはり補足説明が必要かもしれない。この部分も出版社によって句読点の位置が異なる箇所である。

教材について確認する際には、句読点の位置は適切か、という確認も怠ってはなるまい。しかし、大学の演習ではないので、教室で教科書の誤りや不備を指摘することは、なるべく避けたい。高校生の不安を招くばかりだからである。それゆえ、教科書採択の際に時間をかけて検討して欲しいのである。

### 豎点（合符）の使用

豎点<sup>（注1）</sup>の用法は熟語を返読する場合を基本とする。例えば、

封閉宮室 霸有天下

のような場合である。本作品の中には豎点を使用すべき箇所はないのであるが、東京書籍のものはこれを次の二カ所において使用している。

A 其 中 往 来 種 作

B 此 中 人 語 云

右のAとBは「其の中」「此の中」と読むべきである。

「其中」に「そこ」、「此中」に「こゝ」の読み仮名を付すなどは、主義主張というよりも自己満足以外のなにものでもない。その読み仮名を付すためには、豎点（ ）まで使用しなければならないのである。

熟語に特定の訓読みをする場合（何如<sup>いかん</sup>、以為<sup>おもへて</sup>など、いわゆる熟字訓）に、返読しない場合でも豎点を使用する例は、江戸時代の版本およびそれを継承する明治・大正期のものでは、多くみられる。また、熟語や固有名詞（人名・地名）や官職名など、複数の漢字がひとまとまりのものであることを示す際にも多用されたが、現在ではあまり使用しない。前掲のものは、現在では使用されない用法が生き残ってしまった例といつてよいだろう。我々がよく利用する活字本の注釈書には、昭和四十年代に刊行された初版のまま増刷を続けているものがある。その執筆者は当然のことながら明治時代の生まれで、江戸期旧来の訓点に慣れ親しんでいる世代である。その碩学を信頼するが故に、孫引きは後を絶たない。訓点の規則が変わっているにも拘わらずである。語句の読みと訓読符合の用法を吟味せずに、先行文献のままに引用してしまった本文は、新しい訓点の規則を学んでいる高校生にとっては甚だ迷惑である。「特殊な表記は試験に出るに違いない」と（試験にでるのは大抵今までにでてこなかった漢字や符号であることが多い）丸暗記する高校生がいなくても限らないだろう。このように通常では見ることのない豎点の使用法について質問された場合、即座に答えられる新任教師は少ないだろう。

### 踊り字について

熟語で同一の漢字または仮名を重ねることをあらわす符号「踊り字」は、かつてはよく使用されたが、現在は漢文の本文には使用しない。「処々」あるいは「処々」とせずに「処処」と表記するのが正しい。

但し、漢字のなかには、一字であってもその意味によって二度くり返して訓読しなければならないものがある。たとえば、

「数」（しばしば、かずかず）

「時」（ときどき）

「日」（ひび）

などがそれである。このように訓読する箇所において、訓読上の符号として一部に踊り字が残されている場合があ

る。読み仮名の部分、あるいはその漢字の下に「踊り字」(ノ)を使用するのである。「桃花源記」中においては、

「各」(おのおの)

「交」(但し、「こも」も)と訓読する場合のみ)

がそれに該当するが、今回の調査では、明治書院の『新編古典』だけが

各ノ  
おのおの

交ノ  
こも

の表記を用いていた。その他の教科書は「各」<sup>おのおの</sup>とルビを付している。

### 並列記号「・」(なかぐろ)の使用

最近の教科書には、並列を表す印刷記号「・」(なかぐろ)を使用するものが増えつつある。当該教材の本文中にこれを使用するものは、東京書籍、明治書院、教育出版のものと、大修館のもの的一部である。本作品において使用が想定される箇所(名詞を列挙する箇所)は、

良田・美池・桑竹之属

黄髪・垂髫

妻子・邑人

魏・晋

の四力所である。しかし、教科書によって、右のうちの三力所に使用するもの、二力所のみに使用するものとまちまちである。同じように名詞が列挙されているにもかかわらず、使用箇所と不使用箇所があるのは、その意図が不明である。校正が不十分なのであろうか。西洋の符合が漢文の本文中にあつて視覚的に馴染まないのは措くとしても、はたしてこれが必要なものか否か、考え直してみる必要はあるだろう。

確かに漢文の場合は、重なつた単語が、修飾語と被修飾語の関係なのか、主語述語の関係なのか、あるいは並列なのか、解った方が都合が良いには違いないが、同種の語句が並んでいることはすぐに見当が付くはずである。そ

これまで手取足取りのサービスでは漢文を読んだことにはならないのではないか。いつそのこと、書き下し文だけを讀んだ方がよいくらいである。

右にあげた四力所はいずれも、並列であることが明瞭なもののばかりである。それにわざわざ「中黒」を付すことは、視覚的な理解の妨げとなるのはいうまでもない。しかも、教科書によって中黒のポイントの大きさもまちまちであり、文字との大きさのバランスを欠くものさえ見られる。漢文の場合は通常の国語の文章とは異なり、視覚によつて瞬時に判断を下しながら、語順、漢字の読み、送り仮名などをほぼ同時に理解していかなければならない。したがって、訓点符合のたぐいは少なければ少ないに越したことはないのである。理解の手助けになるよりもむしろ邪魔になるようでは意味がない。

ところで、本文中に「なかぐる」を使用する部分を書き下し文に改める際に、「・」はそのまま残すのであろうか。教員は教室でどのように指導しているのであろうか。

## 終わりに

漢文教育において最も効果的な学習方法は言うまでもなく、音読 することであり 暗誦 することである。音読させることは生徒の習熟度を確認するためにも有効である。

繰り返し声に出して読むことによって、漢文特有の言い回しは自然に身に付く。そのことが 暗誦 を楽にすることへもつながる。また、音読することによって、漢文の理解を、視覚だけでなく、聴覚も合わせた二つのルートを経ることの相乗効果によって一層深めることができる。適切な訓読文の暗誦は、同時に原文の暗記をも可能にする。素読 が寺子屋や漢学塾において伝統的に行われてきた所以である。漢文の教材はこの学習法に有効であるよう、視覚的にも十分な配慮がなされなければならない。原文が頭に入ってしまうえば、基本文型にも句法に自信がもてるであろうし、その応用もできるようになる。繰り返しの音読は、原文に慣れ、内容を理解しながら読む力をつけるための基本訓練であると考ええる。



より効果的な授業展開のために、より良い音読学習のために、訓点符合はもつと吟味されてしかるべきである。

訓読の揺れは新任教師の躰きへもつながる。新任教師には疑問を解決する機会も時間の余裕も与えられない状況の昨今である。しかし、ただ黙々と問題集の答え合わせをこなしていくだけの授業は避けたい。教師に自信がなければ、楽しい漢文の授業など望むべくもない。

なお、二度、三度と接する機会のある作品であるが故に、テキストによってあまりに訓読の符号が異なるようであれば、かつて習ったものとの相違は、適切な説明がなければ不快感を招き、或いは自信を失わせ、漢文から一歩身を引いてしまう。漢文嫌いの高校生を生むだけである。

昨今は個別入試の「国語」に漢文問題を含まない大学がふえているとはいえ、センター入試における漢文の配点はそのまま利用するところが多い。その結果、「古典」の授業では、漢文のためにそれほど多く時間をさくことができないが、課外の補習授業ではこれを扱わざるを得ないという奇妙な現象を生みつつある。さらに、正規の授業で古文・漢文を指導する教員と課外補習を担当する教員とが異なり、両者の連携がうまくとれないといった実情がある。それ故に、使用するテキストの出来、不出来、あるいはテキストの表記上の問題を把握しているか否か、によって教育効果に大きな差が出てしまうのである。

本稿は平成十九年度の福岡女子大学研究奨励交付金による「教職をめざす学生支援のための教材研究プロジェクト」の成果報告の資料（未刊行）をもとに執筆したものである。

## 注

（注一）「桃花源記」は、本来は単独の文章ではなく、詩の序文として書かれたものである。その詩は五言三十八句の長篇である。そこには、平和で豊かな稔りをもたらす土地で野良仕事に励み、税に苦しめられることもなく生活をたのしむ人々の暮らしが描かれる。その具体的な描写の後の句「怡然として余れる楽しみ有り、何においてか智慧を勞はさん」（のびやかな暮らし

しの中の有り余る楽しみ、無理に策を弄してあくせくすることもない）によって、陶淵明の求める理想の生き方がここに象徴されていることがわかる。「桃花源記」はその詩の序章なのである。

なお、『陶淵明集』には「桃花源詩并序」とある。（但し、伝本によっては「桃花源記并序」とするものもある。）

- (注2) このゆれは、現代国語表記のための「送り仮名の付け方」に依拠する立場をとるか否かにある。その変遷と方向性については小原宏行「漢文訓読表記のゆれに関する一考察」(上)(下)。(新しい漢字漢文教育) 45・46号。平成十九年十月・平成二十年五月)に詳しい。

- (注3) 今回の研究報告で使用した教科書は以下のものである。(いずれも平成十九年度用)

明治書院『新編古典、大修館『古典1』『漢文読本』、東京書籍『精選古典』『新編古典』、教育出版『古典漢文編』、右文書院『新古典』、研数出版『必修漢文』

- (注4) たとえば、「便」(すなはち)は四回、「復」(また)は五回、といった具合に同じ語がくり返し使用されている。

- (注5) 「さしはさむ」の「さし」は、動詞に冠して語勢を強め、或いは調える、という役割を持つ。

- (注6) 「転倒読みは文義を害する」とは太宰春台の『倭読要領』中に見える考え方である。荻生徂徠や太宰春台は、漢文教育を「中国語教育」と捉えて、返り点の使用を避けて出来る限り音読すべきであると主張した。それに対して、そのような訓読は、日本語の格を破壊するものだと批判した日尾荆山が『訓点復古』を著して、古き良き時代の日本語の格に合わせた訓読に返ることを述べた。

- (注7) この点を解決するために、「遣」を「つかはしてせしむ」と訓読する文献は多い。他の使役の助字にも同様の扱いをされるものがある。

- (注8) 『大漢和辞典』には、「尋」の意味として九番めに「俄に。ついで。まもなく」がある。親文字の意味の後に続いて収載される熟語は七十四箇であるが、その内訳は地名・人名などの固有名詞(人の字や号、書物名は「たずねる」を原義とするものが多い)、距離・寸法をあらわすもの、植物名が各々数例あるほかは、殆どが「たずねる・探し求める」意の熟語である。「尋病」も熟語として載せてはいるが、出典が当該作品なので参考にはならない。なお、『隋書』の列伝等には「ついで」の意味で使っている箇所も見られる。

- (注9) 例えば、冒頭の段落(晋太元中)便捨船從口入)の部分について確認してみると、今回調査した教科書において、九つの文章に分けるもの、十あるいは十一に分けるものも見られた。初級の教材とする場合と上級学年の復習教材としては、一文の長さを変える必要があるだろう。明らかに学習の段階が異なることを想定した編集であるにも拘わらず、句読点の位置や語句の説明

なども考慮せずに全く同じ体裁で載せている出版社があるのは残念なことである。  
(注10) 第一学習社の『新編国語総合』ではこれを「ハイフン」と説明している。

「桃花源記」

晋太元中、武陵人捕<sub>レ</sub>魚為<sub>レ</sub>業。緣<sub>レ</sub>溪行、忘<sub>二</sub>路之遠近<sub>一</sub>。忽逢<sub>二</sub>桃花林<sub>一</sub>。夾<sub>レ</sub>岸數百步、中無<sub>二</sub>雜樹<sub>一</sub>。芳草鮮美、落英繽紛。漁人甚異<sub>レ</sub>之。復前行、欲<sub>二</sub>窮其林<sub>一</sub>。林尽<sub>二</sub>水源<sub>一</sub>、便得<sub>二</sub>一山<sub>一</sub>。山有<sub>二</sub>小口<sub>一</sub>、髣髴若<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>光。便捨<sub>レ</sub>船、從<sub>レ</sub>口入。

初極狹、纔通<sub>レ</sub>人。復行數十步、豁然開朗。土地平曠、屋舍儼然。有<sub>二</sub>良田、美池、桑竹之屬<sub>一</sub>。阡陌交通、雞犬相聞。其中往來種作男女衣著、悉如<sub>二</sub>外人<sub>一</sub>。黃髮、垂髫、並怡然自樂。見<sub>二</sub>漁人<sub>一</sub>、乃大驚、問<sub>レ</sub>所從來。具答之。便要<sub>レ</sub>還家、設酒殺雞作食。村中聞有<sub>二</sub>此人<sub>一</sub>、咸來問訊。自云、先世避<sub>二</sub>秦時亂<sub>一</sub>、率<sub>二</sub>妻子邑人<sub>一</sub>、來<sub>二</sub>此絕境<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>復出焉<sub>一</sub>。遂与<sub>二</sub>外人<sub>一</sub>間隔。問<sub>レ</sub>今是何世。乃不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>漢、無<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>魏晉<sub>一</sub>。此人一一為具言<sub>レ</sub>所聞。皆歎惋。余人各復延至<sub>二</sub>其家<sub>一</sub>、皆出<sub>二</sub>酒食<sub>一</sub>。停數日辞去。此中人語云、不<sub>レ</sub>足<sub>下</sub>為<sub>二</sub>外人<sub>一</sub>道<sub>上</sub>也。

既出得<sub>二</sub>其船<sub>一</sub>、便扶<sub>二</sub>向路<sub>一</sub>。处处誌之。及<sub>二</sub>郡下<sub>一</sub>、詣<sub>二</sub>太守<sub>一</sub>、說如<sub>レ</sub>此。太守即遣<sub>下</sub>人隨<sub>二</sub>其往<sub>一</sub>、尋<sub>中</sub>向所誌、遂迷不<sub>二</sub>復得<sub>レ</sub>路。南陽劉子驥、高尚士也。聞<sub>レ</sub>之欣然規<sub>レ</sub>往。未果、尋病終。後遂無<sub>二</sub>問津者<sub>一</sub>。